

○「宋板には、甘草を二両に作る。今之れに従う」

○「悸は、説文に曰く。心の動なり。活人書に曰く。悸気とは、動気なりと」

○「虚劳裏急云々は、この症に余は毎に黄耆建中湯を用いる。その効は小建中湯に勝れり。学者之れを試せ」

○「裏急とは腹裏狗急を謂うなり。病源の、虚劳裏急の候と、外臺の虚劳裏急篇を、併せ考えるべし」

○「__は、痛なり。素問骨空論に脛__の語あり」

○「金匱要略、黄疸病篇に曰く。男子黄、小便自利、当に虚劳小建中湯を与えるべし。按ずるに、小便自利と不利とは、その常を失うに至れば、則ち同じ。桂枝加黄耆湯症に曰く。黄汗云々、小便不利と、是によって之れを観るに、虚劳小建中湯は、疑うらくは黄耆建中湯を謂うなりや。又按ずるに、深師の、黄耆建中湯症に曰く。虚劳云々小便多し。必効方の、黄耆建中湯症に曰く、小便数と。曰く多、曰く数。之れ又常を失う者なり。益々以て徴するに足るべし。故に余は黄耆建中湯を用いるなり。又按ずるに、本草綱目の、黄耆の部の、総徴論を引くに、小便不通を治する方に、綿黄耆二錢、水二__を一__に煎じて、温服すとあり」

大塚：小建中湯より黄耆建中湯の方がいいんだというような説になっているけれど、私はどちらがいいとかというような問題ではないと思います。「説文」とは字引です。「虚劳裏急」には黄耆建中湯がいいというわけだね。「病源」というのは隋の時代に著された諸病源候論のことね。「深師」とは唐の時代の深師という人が創った処方を目指すのでしょうか。「必効方」というのも本の名前です。色々な本を引用しているね。

伊藤：先生！第一条の条文で先に小建中湯を出して効果がなければ小柴胡湯を出すという意味のことが書かれてありますが、それなら最初から柴胡桂枝湯を出すというような方法は考えられないのでしょうか？

大塚：考えられるんだが状況によるんだ。病気が急に来た時には合方にしないんだ。ここで書いてあるのは「腹中急痛」という劇しい場合で、そんな時は単方で使うように傷寒論では書かれてあるようだ。例えば桂枝人参湯において、桂枝甘草湯と人参湯の合方のように考えられる桂枝人参湯だから区別する必要がないように思うけれど、傷寒論では急な症状がある時には単方で使い分けされるんだ。それでも効かないことはないと思うが「腹中急痛」があるかぎり合方にしない方がいいと思う。慢性病では合方にすることは考えられ

る。

黄耆建中湯

方極文：「小建中湯証にして、而して盜汗自汗ある者を治す」

「小建中湯方内において、黄耆一兩半を加える。

桂枝、生姜、大棗（各四分五釐）甘草（三分）芍薬（九分）黄耆（四分五釐）膠飴（四錢）

右七味。煮ること小建中湯の如きにす」

第一条：「虚勞。裏急諸不足」

按語：「為則按ずるに、当に盜汗黄汗の證あるべし。又曰く。桂枝加芍薬湯は、当に此に入れるべし。而して桂枝の名のあるを以て彼に列すなり」

大塚：小建中湯の症で寝汗が出たり汗がよく出るような時にいいという。これは黄耆の働きによるんだと。第一条は虚勞で裏急とあるから腹がつっ張っておって、諸々の不足とあるから腫物やおできの出来た後になかなか肉が盛り上がってこなかったり、手術をしても肉の盛り上がりが悪いというようなこと。体力が元に戻ってこないのも不足の意味だね。腹直筋がつっぱって体力が元に戻らないということなどが目標だから。華岡青洲はこの処方当帰を加えて帰耆建中湯としているいろんな外科治療の後の回復に役立てたんだ。当帰を入れなくても体力を回復するにはよく効くと思う。尾台先生は小建中湯を使う時には黄耆建中湯にした方がいいと書いているね。欄外にいこう。

○：「千金、外臺にはともに黄耆を三兩に作る。今之れに従う」

○：「この方に、当帰を加えて耆帰建中湯と名づける。諸瘍、膿潰の後、荏苒癒えず、虚羸煩熱自汗盜汗して、稀膿止まず、新肉長ぜざる者を治す。若し悪寒下痢し四肢冷なる者は、更に附子を加える。又痘瘡にて、淡白にして滯膿せず、及び滯膿の際に、平__灰白か、或は内陷外剥し、下痢して微しく冷え、声唾し脈微なる者を治す。伯州散を兼用する。若し下痢せず、通身灼熱し、寒戦して咬牙し、胸腹脹満し、痰喘し口渴し、短気煩躁して、脈数急の者は、死生反掌にあり。調胃承気湯、大承気湯、走馬湯、紫圓の類を選び用いて、以て酷毒を一挙に殲けば、則ち庶幾一生を百死に回すべし。

大塚：「荏苒」とは日が経過してもという意味。「稀膿」というのは薄い水のような膿が出ること。できもので濃い膿になればいいけど薄い膿がいつまでも出続けるのは治りにくく「新肉長ぜず」だから肉がなかなか盛らない者という意味。「悪寒下痢」だからかなり虚証になっているということだ。さらに「四肢冷なる者」となると陰証ですから黄耆建中

湯に附子を加えるということです。「痘瘡」とは天然痘で患部に膿を持つわけですが「淡白にして滯膿せず」だから膿が薄くて膿をしっかり持たないわけです。虚証の場合は膿をもった処が盛り上がり扁平になったままであったり、逆に引っ込んでしまうんだ。張り出さないで色も白いとあるのは虚証だから。下痢をして冷えたり声が出なくなったり脈が弱いのはみな虚している状態だから黄耆建中湯がいいんだと。「寒戦して咬牙し」とは寒けがひどくて口がガタガタして開かない状態のこと。胸や腹が脹って痰が絡んでのどが渇き、呼吸が促迫して煩躁する者は「死生反掌」であるという。「死生反掌」とは生死が手のひらを反すほど差し迫っていて緊迫しているということ。そんな時には調胃承気湯、大承気湯、走馬湯、紫圓で下すということ。「酷毒」とは劇しい毒のことでそれを一挙に下して出せば、死ぬだろうと思われる者でも百のうち一くらいの確率で生きる可能性があるというわけだ。「庶幾」とは『請い願わくば』という意味。ここで伯州散が出てくるけれど急性の化膿性疾患には気をつけなければいけない。うちの奥さんで失敗したことがあるんだ。東京に出て来て間もなくだった。モノモライが臉にできたんだ。湯本先生に聞いたら伯州散がいいというんだ。それで飲ましたら四十度くらいの熱が出て顔が腫れ上がったんだ。急性の炎症がある時に使ったから悪かったんだ。それでびっくりして東大の外科に連れて行って切ってもらったよ。だからね急性の炎症のある時に伯州散を使ったらえらいことになるよ。今は抗生物質があるからいいけどモノモライでも下手に早く切開すると敗血症を起こすよ。以前漢方薬店をしていたんだが矢数君の友人の染谷という人がモノモライが出来たんで病院で切ってもらって熱が四十度くらい出てね、私も診てくというから診に行っただけだけどね、だめだって死んじゃったんだよ。だからモノモライは初期は切ったらよくないよ。まだ葛根湯でも飲んで寝ていた方がよっぽどいいから。だから君たちが初期の化膿性疾患に伯州散を出してひどくにでもしたら薬剤師のせいになって訴えられることがあるよ。気をつけなくっちゃあ。モノモライでも馬鹿にならんからね。

伊藤：ここで千金内托散とか托裏消毒飲なんかは使えないのですか？また区別はあるのですか？

大塚：どちらも使えます。区別は特にしない。千金内托散も慢性の場合はいいけど急性の場合は悪いことがあるよ。急に腫れた場合に使うと悪いよ。急に腫れて熱がある場合は小柴胡湯に桔梗石膏あたりの方がいいよ。千金内托散を使うとよけいに腫れてくる。内托散は日が経過して慢性になって体力が無くなっている時に使う薬だから。体力をつけて強壮的に働いて病気に打ち勝つようにする薬なんだ。消炎剤と思って使うとえらいことになる

よ。

黄耆桂枝五物湯

方極文：「桂枝湯証にして、而して嘔し、身体不仁、急迫せざる者を治す」

「黄耆三両、芍薬三両、桂枝三両、大棗十二枚（各六分）生姜六両（一錢二分）

右五味。水六升を以て、煮て二升を取り、七合を温服す。日に三服す。（水一合八勺を以て、煮て六勺を取る）」

第一条：「血痺。陰陽俱に微。寸口関上微、尺中小緊、外証身体不仁にして、風痺状の如し」

按語：「為則按ずるに、桂枝加黄耆湯証にして而して嘔、急迫なき者」

○「この方、朮附を加えて、産後累月にして、血氣復せず。盗汗し食せず。支体麻痺し、或は微腫の者を治す。又産後已に歳月を経て、而して浴湯毎に、肌膚に不快を覚える者あり。亦この方に宜し。若し腹満せず、その人我が満を言う者、及び_中跳動し、脇腹結実の者は、夷則丸を兼用する」

○身体痺し、而して肌膚習習たるを覚える者、之れを血痺と謂う。身体痺し、而して不仁する者を、之れを風痺と謂う。風痺は、肌膚頑麻して、痛痒を知らざるなり」

大塚：黄耆建中湯の甘草と膠飴のない処方だね。「風痺」というのはしびれて痛むのがそうなんだよ。「血痺」も知覚麻痺があるわけだ。「陰陽俱に微。寸口関上微、尺中小緊」というところはおそらく後人の注釈だと思うんだ。寸口と関上が微で、尺中が少し緊だなんて我々ではなかなかわかりにくいんだよね。麻痺があって内臓に特に異常がなく、下痢とか便秘とかなく、しびれだけがある場合を目標にして使えばいいんだ。昔よく脚気があったので使った。今では顔面神経麻痺に使う。ただこの場合に痛みがあるとその処方をあまり使わず痛みのない場合に使うんだ。戦争中に私が牛込に住んでいたんだが、私の家から坂を上った所にお金持ちの大きな邸宅があってね。そこによく肥えて色の白い奥さんがいたんだ。家族の人は漢方が好きでよくうちに来たんだ。その奥さんが夏だったと思うが着物の裾が足にあたっても痛いと言うんだ。感覚がないのに着物の裾があたると痛いと言うんだ。下半身に全く感覚がなくて病院で診てもらったら脚気だと言われたんだって。風呂に入ってちょっと熱くてもうんと熱く感じるんだって言うんだよ。食欲も変わりはないし他に症状はない。その奥さんに黄耆桂枝五物湯を使ったんだ。そしたら2～3週間ですっかりよくなってえらい喜ばれたことがある。黄耆桂枝五物湯は水を去るから知覚麻痺で少し浮腫があるような場合によく効くんだ。

欄外では黄耆桂枝五物湯に朮と附子を加えてお産の後で幾日も経過しているのに、血気が回復しないで食欲もなく、寝汗が出てしびれたり浮腫みがあるような状態に使うと書いてある。昔は産後に脚気になる者が多かったのでその症状だろう。脚気でなくても貧血であったり気力がなかつたり寝汗が出たりしてむくんでいれば使っていいんだ。そして先ほど話したように風呂に入るときに気持ちが悪の場合などにもいいんだ。_中とは胸のこと。胸がおどるような者ということだ。そして「腹満せず、その人我が満を言う者」とは腹が他覚的にも張っていないのにいっばいだと言う者はという意味。このような場合は瘀血の症だな。「肌膚習習たるを覚える者」とはしびれて感覚がおかしくなった状態。ここで「血痺」と「風痺」の違いを言っているがわかりにくいね。

黄耆芍薬桂枝苦酒湯

方極文：「身体腫れ、発熱して汗出で、汗衣を沾し、色正黄、拍汁の如き者を治す」

「黄耆五兩（一錢五分）芍薬、桂枝、各三兩（九分）」

右三味。苦酒一升を以て、水七升と、相和し、煮て三升を取る。一升を温服す。（苦酒二勺と、水一合四勺とを、煮て六勺を取る）

当に心煩すべし。服すること六七日に至れば、乃ち解す。若し心煩止まざる者は、苦酒の阻むをもつての故なり」

第一条：「問うて曰く。黄汗の病たる、身体腫れ、発熱汗出で而して渴し、状は風水の如し。汗衣を沾し、色正黄にして薬汁の如し。脈は自ら沈。何に従って之れを得るや。師の曰く。汗出で水中に入り浴し、水の汗孔より入りて以て之れを得るや」

○「本邦の錯は、気味が巖冽なり。故に法の如きに之れを煮るも、間々服すること能わざる者あり。若し服すること能わざる者には、水にて煮て用いるべし」

○「阻とは、格なり。病毒と、相阻格し、故に心煩を発すなり。傷寒例に曰く。凡そ汗を発し、湯薬を温服し、云々。若し病と相阻すれば、即ちたちまち覚える所ありと。是なり」

○「千金方に、沾を染めるに作る。薬は拍に作る。是なり」

大塚：「若し病と相阻すれば、即ちたちまち覚える所あり」というのは瞑眩のことを言っているんだろう。この処方僕が使ったことがないので特に言うことはない。

桂枝甘草湯

方極文：「上衝して急迫する者を治す」

「桂枝四兩（二錢）甘草一兩（一錢）」

右三味。水三升を以て、煮て一升を取り、滓を去り、頓服す。（水一合八勺を以て、煮て六勺を取る）

第一条：「発汗過多、その人叉手し、自ら心を冒し、心下悸し、按ずるを得んと欲する者」

按語：「為則按ずるに、当に急迫の証あるべし」

○「両手を相錯するを叉と曰う。覆うなり。心下悸して、而して上衝急迫し、手を以て親しく心胸を覆壓すれば、稍安きを覚える。故に又人をして之れを按ずることを得んと欲するなり。然して之れを桂枝加桂湯に比すれば、衝逆なお軽き者なり」

大塚：桂枝甘草湯というのは医者が発汗をし過ぎたために動悸がして、そのために手を心臓の上に覆うようにあてがってさ、するようなしぐさをするということだ。注意することは汗を出し過ぎて体液が少なくなっていくという意味として「発汗過多」と書いているけれども、汗を出し過ぎなくても疲れていて動悸がするというだけでも桂枝甘草湯の目標になるから。ただ炙甘草湯においても同じように心悸亢進が起きることがある。欄外では両手を組み合わせて胸を覆い、下から動悸がつきあげてくるように思うから手で押さえようとしているんだと。そうするとやや軽くなるような気がするんだと。人に胸を押さえてもらってもいいんだと。その後で桂枝加桂湯に比べて軽いと言っているけれども軽いんではなくて違うんだな～。桂枝加桂湯の衝逆は動悸というより頭痛のほうがひどいわけだからここでは掌握の仕方が違うんだよ。だから桂枝と甘草が入っている簡単な処方では全て心悸亢進の症状があると思っていいんだ。桂枝甘草龍骨牡蠣湯だって苓桂甘藶湯だって苓桂朮甘湯だって症状に動悸があるんだ。

半夏散及湯

方極文：「咽喉痛く、上衝急迫する者を治す」

「半夏・桂枝・甘草 各等分

右三味。各別に搗き篩いおわり、之れを合治して、白飲に和し、方寸匕を服す。日に三服する。若し散を服すること能わざる者は、水一升を以て、煎じること七沸、散兩方寸匕を入れ、更に煮ること三沸、火より下ろし小冷せしめ、少々あて之れを嚥む。」

（水一合を以て、空煮るすること七沸、薬末二錢を入れ、三沸して小冷せしめ、少々あて之れを嚥む）

「少陰病。咽中痛む者」

大塚：「白飲」というのはおもゆのことね。「方寸匕」というのは一辺が一寸の四角の匙

のこと。粉でそのまま飲めない場合は簡単に煎じて服用していいんだと。その時に火から降ろして少しずつ服用してくださいと。そういうことですね。半夏散はひじょうによく効きそうに書いてありますので私も何度か使ってみましたけれど、あまり大して効果があったためしがない薬です。飲みやすいし簡単で味もいいので使ってみたけど、少陰病であり熱がない時にいいだろうと思って使ってみたがあまり効果がないようです。「喉中痛む」と「喉痛む」とはちがうと言う人がいますがあまり区別する必要はないでしょう。

欄外にいきましょう。

○「喉痺し、腫れ痛み、声音出ず、頭項強痛し、惡風寒する者は、この方に桔梗と大黃を加えて煎じ服し快利を取る。兼ねて氷礬散を吹く。若し腫れ甚だしく、湯薬下らざる者は、惡血を刺去すれば、則ち咽中頓に鬆を得る。而して後に湯薬を与えるべし」

○「纏喉風にて、痰湧き痛み楚しみ、咽喉閉塞する者は、まず丹礬・枯礬の二味を咽中に吹き、頑痰を誘吐せしめ、而して後に此の方を与えるべし」

大塚：「喉痺」とは喉の塞がる病気で扁桃周囲炎や咽喉ジフテリーなどでしょう。声が出ないということは声帯や喉頭あたりまで影響しているということでしょう。「氷礬散」は結晶した礬砂を使う処方ではなかったかな？はっきり今はわからないので調べてください。そして喉が腫れて煎じ薬が飲めない人は扁桃に鍼を刺して膿血を出せば楽になると書いてある。「纏喉風」というのは喉頭ジフテリーです。「痰湧き痛み楚しみ」とあるから痛みと共に喉から痰が出てきて塞がってしまうんです。「丹礬」が硫酸銅だったっけ？「枯礬」が明礬だったかな？その二つを喉に吹き込めば粘ばい痰が出てくるからその後で煎じ薬を飲ませよということだ。「丹礬・枯礬」をちょっと調べてみようか。・・

最近では声がすぐ出なくなってしまうんだ。昔はこんなではなかったんだがな。

伊藤：先生！治頭瘡一方のことをすこし教えて頂けますか？

大塚：この処方では子供のアレルギー性の湿疹によく使うんだ。この頃はアトピー性皮膚炎と言うんだ。喘息があるような患者に多くおこるんだ。

伊藤：脂漏性湿疹というのはどんなんでしょう？

大塚：脂漏性湿疹というのは主に頭に出来る湿疹で、うんとふけが出て痒い病気です。頭の皮がぼろぼろ落ちてきて痒いんです。

伊藤：治頭瘡一方はそんな病気の時にもいいですか？

大塚：うん。いいことがある。それに地黄を加えるといい場合があるんだ。小学校一年生の女の子で○島○子さん！よく治ってきたらう。 昭和49年6月25日（火曜日）

(桂枝人参湯から)

桂枝人参湯

方極文：「人参湯証にて、上衝急迫劇しき者を治す」

「桂枝・甘草 各四兩（八分）朮・人参・乾姜 各三兩（六分）」

右五味。水九升を以て、まず四味を煮て、五升を取り、桂を入れ、更に煮て三升を取る。一升を温服する。（水一合八勺を以て、煮て六勺を取る）日に再び。夜一服する」

「太陽病。外証未だ除かず。而してしばしば之れを下し遂に協熱して利し、利下止まず。心下痞硬し、表裏解せざる者」

大塚：「太陽病。外証未だ除かず」だから悪寒とか発熱とか体が痛いとかの外症がまだあるわけですね。こんな時にはまだ下してはいけないのに「しばしば之れを下す」わけですね。「遂に」という意味は現代では『とうとう』という意味ですが傷寒論ではある一つの原因があって、例えば汗を出すとか下すとかの行程を経て、引き続いて「遂に」以下の症状が起きてくるという意味なんです。ここでは下した為に「協熱」して、「協熱」というのは体の表の熱が取りきれないうちに下してしまうものだから裏も虚して冷えてしまうわけですね。ですから表の熱を桂枝で取り裏の寒を人参で温めるとこうゆうわけですね。「利下」というのは頻りに下痢することでそれが止まないと。「心下痞硬」とは人参湯の症だから。だから表は熱があって裏は寒があって下痢をすることを「協熱利」ということね。このような状態は急性で起きるから我々が日常あまり診ることはないね。だから風邪でおなかをこわして冷やした場合などに使う処方なんだよね。自分では経験するかもしれないが患者ではこんな状態ではまず来ないよ。今朝から急に下痢をして寒けがして熱があって腹が痛いんだというような人は来はしないよ。まず歩くことが出来ないから。でも葛根湯の下痢とよく似ているんだ。葛根湯でも寒けがして熱が出るんだ。そして下痢をするから区別することが大事になってくるんだ。葛根湯を使う場合で下痢をして熱があって寒けがするということがあるだろう。区別は葛根湯は実の状態桂枝人参湯は虚の状態なんだ。桂枝人参湯は脈も力がないし元気もないし体力がないんだ。葛根湯の場合には「裏急後重」といって渋り腹になって腹が痛むんだ。渋り腹の場合にはたいてい芍薬が入っているんだ。葛根湯は芍薬が入っているが桂枝人参湯は入っていないだろう。桂枝加芍薬湯も芍薬が多く入っているから渋り腹にいいんだ。渋り腹というのは便がしたくて便所に行くんだが軟らかい便がすこししか出ないで後に腹が痛むんだ。桂枝人参湯の場合にはさっと下るんだ。うちにいた善ちゃんもね典型的な葛根湯の下痢をしたことがあるんだ。熱が四十度くら

い出てね。腹が痛んで下痢をしてね。半夏瀉心湯を使ってみたけど治らないんだ。それで葛根湯を使ったらさっと治ってしまったんだ。葛根湯を下痢に使う場合には急性の腸カタルだから。これは外来の漢方の患者で来院することはまずないんだ。家族や自分で経験することはあるかもしれないが。それよりもね、人參湯症で上衝があつて頭痛する場合に使えることがかなりある。胃腸がうんと弱い人で頭痛がして眩暈があつたり動悸がする人にいい場合があるんだ。人參湯症だから胃の部分で振水音があつたり腹に力なく食欲がないとかがあれば使えるんだ。それから動悸がある人に使えるんだ。頭痛があつて息切れがあるという場合もいいんだ。そんな時には人參湯よりも桂枝人參湯の方が使いやすいんだ。欄外には詳しくこれらのことが書いてあるから読みましょう。

○「此の方は当に人參湯の下に在るべし。桂枝を主薬とするを以て、故に桂枝劑の次に列すなり。説は東洞先生の方極或問中に見える」

○「頭痛発熱し、汗出で悪風し、肢体倦怠、心下支__し、水瀉すること傾くが如き者、夏秋の間に、多く之れあり。此の方に宜し。按ずるに、人參湯は吐利を主どり、此の方は、下痢をして表症ある者を主どる」

○「協は、挟と同じ。玉函、脈経、千金翼は、皆挟に作るなり。宋版には協に作る。協熱下痢、此れは表症未だ除かず、而してしばしば之れを下すを以ての、故に素裏寒あるに、表熱を挟んで、而して下痢止まざるなり。桂枝人參湯を以て主さどるは、桂枝を以て表を解し、朮、乾姜にて寒飲を__き、下痢を止む。人參は心下痞硬を解し、甘草はその急なるを緩める。一味たりとも加損するを得ず。古方の簡約、その妙たるやかくの如し」

大塚：「夏秋の間に、多く之れあり」とは冷たいものを食べ過ぎたり飲み過ぎて下痢することね。「協熱下痢、此れは表症未だ除かず云々」とはもともと胃腸の弱い人に表症が残っているのに下した為に結果的に下痢が止まなくなるという意味です。

人參湯

方極文：「心下痞硬し、小便不利、或は急痛、或は胸中痺する者を治す」

「人參・甘草・朮・乾姜 各三両（七分五釐）」

右四味。搗きて篩い末と為し、密を和し、丸めること鶏黄大の如し。沸湯数合を以て、一丸を和し、研碎し之れを温服する。日に三服し。夜に二服す。腹中未だ熱せざれば、益こと三四丸に至る。然れども湯には及ばず。湯法は、四物を以て両数に依つて切り、水八升を用いて、煮て三升を取る。滓を去り、一升を温服す。（水一合六勺を以て、煮て六勺を取る）日に三服す。加減法。若し臍上にて築する者は、腎氣の動なり。朮を去つて桂四

兩を加える。吐の多き者は、朮を去って生姜三兩を加える。下多き者は、還って朮を用い、悸する者は、茯苓二兩を加える。渴して水を得んと欲する者は、朮を加えて前に足し四兩半と為す。腹中痛む者は、人參を加えて前に足し四兩半と為す。寒する者は、乾姜を前に足して四兩半と為す。腹滿なる者は、朮を去り附子一枚を加える。湯を服した後、食頃の如くにして、熱き粥の一升ばかりを飲む。徹しく自ら温む。衣被を発揭すること勿れ」大塚：「然れども湯には及ばず」とは丸薬を解かして飲むよりも煎じ薬の方が効果がいいという意味だ。丸薬にしたものを「理中丸」と言うけれど「理中」と「建中」という用語があって、人參湯の方を理中丸といい建中の方を小建中湯に当ててゐるんです。方極文に「急痛、或は胸中痺する者」とあるけれど病名に当てれば肋間神経痛とか狭心症なども含まれる。東洞先生は方極文で「小便不利」と書いているが、これは人參湯に朮が入っているから先生が足したわけで、我々が人參湯の患者を診る時にはむしろ「小便自利」の者が多いようです。裏が冷えているから小便も出やすいし唾が口に溜りやすくなってくる。傷寒論・金匱要略をよく条文を読めばわかることだが「小便不利」を人參湯を使う時の目標にすることは出来ないでしょう。理中丸の服用法だが卵の黄身くらいに固めたものを沸騰水に入れて軟らかくし食べるようにして服用するんだらうな。一日に五回服用するように書いてある。それで腹が温かくならなければ三丸から四丸を食べるようにせよと書いてある。その後には先ほども言ったが丸薬の理中丸より人參湯の方がいいというわけね。しかし実際に昔風に卵の黄身くらいの大きさの理中丸を使っている人はいないでしょう。「加減法云々」以下は後人が追加した部分で本論ではないでしょう。しかし参考になるから。「臍上の築」というのはへその上で動悸がすることで、それは腎気が衰えて動悸がするんだというわけです。徳川時代の本に「水分の動」という言葉がよく出てくるけれどそれと同じことだ。その場合には朮を去って桂枝を加えると書いているが、私は朮を去らないで桂枝だけを加えて桂枝人參湯で使えばいいように思うけどね。吐き気がある者は生姜を加えると。下痢する者は朮を用いよと。それから「食頃の如く」というのは食事をする間の時間のことだから三十分くらいだらうな。「衣被を発揭すること勿れ」とは衣服をみだりに脱いで寒くしてはだめだということですね。じゃあ先に進もうか。

第一条：「傷寒。湯薬を服し、下痢止まずして、心下痞硬す。瀉心湯を服しおわり、また他薬を以て之れを下し、利止まず。医の理中を以て之れに与う。利ますます甚だし。理中とは中焦を理すなり。此の利は下焦にありて、赤石脂禹余糧湯之れ主どる。復利止まざる者は、当にその小便を利すべし」

第二条：「霍乱にて、頭痛発熱し、身体痛み、熱多く水を飲まんとする者は、五苓散之れ主どる。寒多く水を用いざる者は、理中丸之れ主どる」

第三条：「大病癒えた後、喜唾し、久しく了了たらざる者は、胃上に寒在るなり。当に丸薬を以て之れを温めるべし」

第四条：「胸痺。心中痞し、留気結んで胸に在り。胸満し、脇下より心に逆__するは、枳実薤白桂枝湯之れを主どる。人参湯も亦之れを主どる」

大塚：第一条で「瀉心湯を服し」の次に「已」という字があって一般的には「おわり」と読まれているけれど説がいろいろあるんだ。べつに『飲みおわって』ということでもなくともいいわけだから。しかし他に読みようもないので「おわり」と読んでおきます。

傷寒に罹って煎じ薬を服用したけれど下痢が止まず、みぞおちが硬く痞えてきたので瀉心湯を服用したと。瀉心湯は半夏瀉心湯やら甘草瀉心湯やら三黄瀉心湯やらはっきりわからないけれども、下痢する時に使っているので三黄瀉心湯ではないと思う。半夏瀉心湯か甘草瀉心湯だったろうと思う。しかしそれらを服用しても下痢がよくならなかったから、おなかによけいなものがあるって、それが原因で下痢すると考えて調胃承気湯などですこし下したんだらう。それでも下痢が止まらない。それでは今度は温めてみようと考えて「理中を以て」すなわち理中丸で裏を温めるわけね。ところが理中丸を服した後も下痢が止まらない。理中丸は中焦を調整する薬でここでの下痢の原因は下焦にあるんだから、則ち直腸に近い方に故障があって下痢をするんだから赤石脂禹余糧湯で治すんだと。この処方収斂作用があるんだ。昔、私が医者になり始めの時には下痢止めにビスミットという薬を使ったんだよ。大腸の端の直腸に近いところに原因があって下痢をする時に使うわけ。だが赤石脂禹余糧湯を使っても下痢が止まない時には小便を出すことを考えた方がいいだろうと。小便を利するには五苓散などを使うんだらうな。胃腸が弱くすこし下痢気味だというような患者で心下痞硬があって、そうかと言って半夏瀉心湯を与えたらよけいに下痢をするという者には人参湯とか真武湯を使えばたいいよくなるんだよ。めったに赤石脂禹余糧湯は使わないな。赤石脂を使うと胃の弱い人などは食欲がなくなるんだ。赤石脂は脱肛とか痔に使うことはあっても胃にはよくないんだ。まず人参湯を出して、それでだめなら真武湯を出せばたいいよくなる。

伊藤：先生！人参湯と真武湯の合方の温武湯にはそれなりの症があるんでしょうか？

大塚：部位的には人参湯は中焦で真武湯は下焦に効くわけだから、真武湯だけでは食欲が出ない時に人参湯を合わせて温武湯にすればいいんだ。だから人参湯にしようか真武湯に

しょうか迷った時に、ちょっとずるいけど温武湯にすればいい。

吉本：加減法のところで「腹満の者は、朮を去り附子一枚を加える」ありますがどうでしょうか？

大塚：うん。意味がわからないな。見当つかんよ。なぜ附子が入るんだろう。

第二条で「霍乱」というのは吐いたり下したりすることで急性吐瀉病のことだ。それで体が痛くって、熱があって水を多く飲みたがれば五苓散を与えればいい。寒けがあって水を飲みたくない者は理中丸でいいと、わかりやすいように書かれてあるが実際にはこの通りの患者が来るとは限らず難しいんだ。「熱多く」と書かれてあるがここは体温計で測って熱が高いわけではないからね。理中丸でも三十八度位の熱がある場合だってあるさ。だからこの場合は脈が大事になってくるんだ。脈が速くもなく浮いてもいなければ「寒」とみななければいけないし、舌がひじょうに乾燥して水を飲みたがる時には五苓散と考えていいけど。ただ二つか三つくらいの子供の場合に困るんだ。そんな時期に吐き下しが多いんだよね。子供で吐いたり下したり熱がある場合、水を与えたら吐いて小便が出にくくなって熱があり、便は下痢してる場合もあるしない場合もある。そういう場合だったら五苓散を使えば大概大丈夫だな。人参湯の場合には割合吐くことは少なくて下痢の方が多いし煩躁状態が五苓散の方が強い。煩躁状態というのはじっと蒲団の中で寝ていないんだ。蒲団から転がり出てね動き回るんだ。なぜかと言うと五苓散を使う子は『陽』だから。人参湯を使う場合は『陰』で静かにしてるんだよ。外にあまり症状が出てこないんだ。区別がつかない場合にはどちらかを先に与えてみるんだな。たいていこのような場合には一服で勝負がつくから。一服与えてね三十分か一時間観察してね、よかったら続けるようにするんだ。第三条で「大病癒えて後、喜唾」とは大きな病気をした後で、口に唾が溜る傾向があり「了了せず」とはさっぱりしないということ。その場合には理中丸がいいとあるがここはひじょうに大切な条文で、大病をした後でなくとも口に薄い唾が溜ってさっぱりしないというだけで人参湯を使う大切な症だから。患者さんが口に薄い唾が溜ると言う場合に人参湯の場合と八味丸の場合の二つがあるんだよね。人参湯の症の人に八味丸をやると悪くなるよ。区別は難しいけれど。だいたいにおいて人参湯の場合が多いんだ。八味丸の場合は少ないんだ。だからわからない時には人参湯を先に使った方がいいでしょう。八味丸で唾が溜るといのは腎が虚してそうなるわけで少ないんだ。しかしまあ食欲がなくて胃にものが痞えて口に唾が溜りやすいし、それを飲み込むと気持ちが悪いと訴えてきた者はまず人参湯と考えて間違いないだろう。この場合に小便が近い場合が多いんだ。これが五苓

散であったら小便が出ないことが多いんだ。裏が冷えているから口に唾も溜る、小便も出るとというのが人参湯だね。

吉本：八味丸の小便の状態はどうなんですか？

大塚：八味丸も小便が出にくいんだ。だからますますわかりにくくなるんだ。だが食欲がないとか胃腸の症状があれば八味丸を使ったらまずよくないな。それで人参湯を使っていたらだんだん唾が濃くなってきてくるんだ。第四条で「胸痞」と出てくるのは胸が塞がったような状態だ。「心中痞」は自覚的に胸がつまったような感じ。いずれも自覚症状だね。これは「留気」とあるからガスとかが胸にいっぱいつまって塞がったように感じるんだと。「胸満」とはみぞおちが張ってくること。「脇下より心に逆す」だから脇の下からとはおなかの下から心臓に向けて槍で突かれるように痛みが突き上げてくるわけで、これは枳実薤白桂枝湯の症でもあるし人参湯の症でもあるというわけです。欄外には二つの違う処方と同じ症状を治すのは間違いだと書いているが私はこういう状態はあると思う。ただ枳実薤白桂枝湯の方が実の状態だよ。人参湯で第四条の状態の時におなかを診ると、腹の表面がベニヤ板を張ったような状態なんだよ。腹直筋が張っているんだ。だが第一条の下痢だとか第三条の唾が多いとかという場合には腹部軟弱無力の場合が多いんだ。ところが「胸痞」の場合は腹が硬くてつつ張ったようになっているんだ。弾力もなくて腹の表面だけが硬くって胸に刺し込んでくるんだ。胸に刺し込む場合に腹部軟弱ということはないんです。たいてい痩せている人に多い。枳実薤白桂枝湯はこれは胃の方ではなくて病気で言えば狭心症などで使うんだ。心臓に関係する痛みを使うんだ。

吉本：先生！第一条で赤石脂禹余糧湯を使った後で下痢が止まない場合には小便を出すようにしなさいと書かれてありますが、先ほどの説明のように五苓散を使うんでしょうか？

大塚：ここはね、意味の解釈がいろいろあって五苓散のような処方を使うという説と、他の条文が間違っ入っているんだという説もあるんだ。「復利止まざる」という「復」の字の意味は解釈しようが難しいのよね。言葉だけで解釈すれば『赤石脂禹余糧湯を服して更に下痢が止まないのは・・・』という意味になるね。それで下痢を小便を出すことで止めるとなると五苓散か猪苓湯になると思うよ。でも第一条の文章は前後の連絡が悪いわね。では欄外に入ります。

○「産後続いて下痢を得て、乾嘔して食せず、心下痞硬して、腹痛み、小便不利する者。諸病久しく癒えず、心下痞硬し、乾嘔して食せず、時々腹痛み、大便濡瀉、微しく腫れる等の症をあらわす者。老人にして寒暑の候毎に、下痢し、腹中冷痛して、瀝瀝たる声あり

、小便禁せず、心下痞硬し、乾嘔する者は、俱に難治と為す。此の方に宜し。若し悪寒し、或は四肢冷の者は、附子を加える」

○「加減法は、後人の讒入なり。説は小青龍湯の標に詳し」

○「傷寒、湯薬を服し云々は、説は赤石脂禹余糧湯の標に見える」

○「霍乱云々は、玉函、千金翼、理中湯が之れを主どるに作る」

○「楊雄方の言に曰く、了は、快なり。了了たらずとは、尚快然たらざるを言うなりと。寒は、水飲なり」

○「胸痞云々、枳実薤白桂枝湯之れを主どり、人参湯も亦之れを主どると。金匱要略に、間々此の例あり。是も後人の讒入なり。夫れ仲景の方たるや、僅か一味の去加、一品の増減において、各その義ありて而して存の有らざること為し。況やその方の已に異なりて、その主治する所において豈別なからんや。案ずるに、此の条は枳実薤白桂枝湯の正症なり。若し人参湯症にして胸痞するならば、人参湯を与えるべし。方極を以て見るべし。又案ずるに、外臺の胸痞門の、理中湯と、本草綱目の、人参部の附方に、併せて此の条を引いて、心に逆__を、逆気心を__くに作る」

○「痞とは、閉塞して痛むを謂うなり。胸痞とは、胸中痞塞して痛むなり。是なり」

大塚：「大便濡瀉」の「濡」の意味は湿って軟らかくなった状態。水でぬれて軟らかくなったような状態の便でシャーとした下痢ではなく便の形がないような軟便のことだね。

「微しく腫れる」とあるから体がむくむんだね。長い病気の後や産後で下痢が続いて、みぞおちが痞えて食欲がなく腫れてくるという状態はかなり虚証ですね。「老人にして寒暑の候毎に」とあるから気候の変わり目に下痢をしておなか冷えて痛むと。「瀝瀝」とはおなかがゴロゴロ鳴る様子。そして小便が漏れそうになるんだね。行きたくなったら漏れそうになることでいずれも難治ですよ。若し悪寒があって冷えが強い場合には附子を加えよと書いてある。こうゆうことね。この部分は参考になるでしょう。

吉本：先生！先ほど質問しました赤石脂禹余糧湯で下痢が止まない時に小便を出させる処方として五苓散と猪苓湯と言われましたが、類聚方広義の赤石脂禹余糧湯の欄外を見ますと猪苓湯と真武湯ということが書かれてありました。

大塚：そうか。人参湯の欄外で「夫れ仲景の方たるや、僅か一味の去加～」とあるのは傷寒論では一味といえどもその薬が使われていることにおいては理由があるんだというわけだね。況や処方が違えばそれぞれ主治するところは違うんだから違う処方で同じ症状を治すということはないということを行っている。だから枳実薤白桂枝湯と人参湯を同じ「胸痺

」に使うことは間違いだと。こうゆうわけです。

人参湯を使うのに処方集の通りの分量で出したらよく浮腫みができることがあるよ。人参湯を3日くらい服用したら浮腫みができるんだがその場合は証は間違っていないんだ。他の症状はひじょうによくなるんだ。ただ浮腫みができるから患者さんがびっくりする。その時に五苓散を飲ましたら浮腫みがとれるんだ。人参湯の甘草の量が多いと浮腫みができるんだ。一日分で四グラム以上の甘草を使うと浮腫むことが多いよ。

伊藤：先生！熱と寒の区別は脈とか舌の状態で診ることを教えていただきましたが、腹診で区別出来るのでしょうか？鍼灸学校で腹を触っていますと冷たい人がいるのですがそんな人は寒と判断してはいけないのでしょうか？

大塚：たしかにそんな腹が冷たい場合は寒の人が多いですよ。それから自覚的に腹が冷える人も寒に属します。ただ自分の手が冷たい時に触ると感覚がおかしくなるし患者の腹も冷えるので考えなければいけないよな～。次にいきましょう。

茯苓杏仁甘草湯

方極文：「悸して而して胸中痺する者を治す」

「茯苓・三兩（一錢五分）杏仁・五十個（一錢）甘草一兩（五分）

右三味。水一斗を以て、煮て五升を取り、一升を温服す。（水一合二勺を以て煮て六勺を取る）日に三服す。癒えずんば更に服せ」

第一条：「胸痺にて、胸中気塞し、短気するは、茯苓杏仁甘草之れを主どる。橘枳姜湯も亦之れを主どる」

○「按ずるに、胸痺にて、胸中気塞し、短気して、心下悸して、喘する者は、茯苓杏仁甘草湯之れを主どる。胸痺は、胸中痞満して、嘔__する者は、橘皮枳実生姜湯之れを主どる。此の条はもと胸痺の軽き症なり。茯苓杏仁甘草湯に宜し。その義は詳しく拙著の重校薬徴に弁ず。また按ずるに、千金、外臺に、橘枳姜湯も亦之れを主どるの七字無し。是なり」

○「短気とは、気急して息迫るなり」

○「嬰兒にて、喘咳し乳食を吐し、虚里跳動して、小便不利し、腹に他異無き者は、此の方に半夏を加えれば効あり」

大塚：この処方簡単な組み合わせですが動悸がして胸が塞がる時に使う処方ですね。「胸痺」というから胸が塞がったようで痛い。「短気」とは呼吸が促迫することだから、動悸がする時や胸が苦しい時に使うわけです。それで茯苓杏仁甘草湯と橘皮枳実生姜湯の両

方使う場合があると。欄外に書いてあるけれど実際に心臓が悪くって、胸が塞がったように、ちょっと動くと息がはずみ、同時に足や腹に浮腫みが出るような時には橘皮枳実生姜湯よりは茯苓杏仁甘草湯の症の方が多い。急にきた病気ではなくて慢性的に心臓病があって一時的に症状が悪化したような場合とか、あるいは体がひじょうに弱ってきて強い薬が使えないような場合に茯苓杏仁甘草湯を使います。この場合の甘草の量が多いとまずいんだよな。ここでも一両しか使っていないだろう。多く使うと胃にもたれたようになるんだ。茯苓と杏仁を思いきって多く使うことが肝心だ。

茯苓杏仁甘草湯の途中から

(欄外の説明から)

大塚：「胸痺」の症で胸が塞がって、息切れがして、みぞおちが痞えて咳が出る者は茯苓杏仁甘草湯がいいと。同じく「胸痺」の症で胸が痞えたようで吐き気がしてしゃっくりが出る者は橘皮枳実生姜湯がいいというわけ。それでね橘皮枳実生姜湯に人参と朮と茯苓が加わると茯苓飲になるんだ。茯苓飲は胃に停水があって胸がつまる感じがする場合に使われるんだ。水が関係するので茯苓や朮が加わってくるんだ。橘皮枳実生姜湯は水よりむしろ気がつまって胸が苦しくなるんだから例えば喘息の呼吸困難の発作なんかで体の弱い人に使うことがある。嬰兒というのは乳飲み子のこと。咳とともに飲んだ乳を吐いて「虚里」というのは心臓のあたりで動悸がひどくて小便が出ない場合。あるいは腹に特に異常がみられない時には茯苓杏仁甘草湯に半夏を加えればよく効くんだというわけだ。だけど私はこの通りにやった経験がないんです。じゃあ先にいきましょうか。

茯苓戎塩湯

方極文：「心下悸して、小便不利する者を治す」

「茯苓半斤（二錢）朮二兩（五分）戎塩弾丸大一枚（六分）

右三味。まず当に茯苓朮をすすめ、煎じとなして、塩を入れて再煎し、分ちち温めて三服する。（水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、滓を去り、塩を入れ、消しせしめて服す）」

第一条：「小便不利。蒲灰散之れを主どる。滑石白魚散、茯苓戎塩湯も併せ之れを主どる」

按語：「為則按ずるに、まさに心下悸の證あるべし。また按ずるに、この方の煎方は詳らかならず。他例に依って、まさに水六升を以て、煮て三升を取り、滓を去り、戎塩を入れて、一二沸し、分ちち温めて三服する」

○「孫思邈の曰く。弾丸は十梧桐子を以て、之れに準ずと。

○「この方の煎法は明らかならず。故に東洞先生他の例を視て、以て之れを裁定する。按ずるに、程本には、水五升を以て、煮て三升を取り、分ちち温めて三服すと作る。金鑑も同じ。また按ずるに、戎塩一枚は、疑うに二枚の誤りならん。余は常に二枚を用いる。故に今二枚に準じて分量に注す」

大塚：戎塩というのは中国で採れる岩塩のことですね。弾丸というのはアオギリの実が十個くらいというんだからかなりの量があるよね。ふつう動悸がして小便が出ない時に塩を

を飲んでいいだろうか？と思うが面白いよな。茯苓と朮を先に煎じて後で塩を入れて再煎すると書いてある。蒲灰散とか滑石白魚散とかは小便の出る道、例えば尿道とか膀胱だとかの障害があって滑らかに小便が出ない時に使う処方だから。そうすると茯苓戎塩湯も腎臓とか心臓が悪くて小便が出ない時ではなくて、尿道とか膀胱等の尿路に障害がある時に使われる処方だと考えられる。蒲灰散とは蒲の穂を使う処方ですから。蒲の穂を触ったらつるつるして滑らかだよ。だから内服することで小便の通路が滑らかになると昔の人は考えたんだね。刺激もなく消炎作用があるんだろう。滑石というのはタルクのこと。白魚とは本の中にいるシミのことだから。白魚は銀色をしていてね、つぶそうとしても指に白い粉がついてするりと逃げてしまうんだ。後で指を洗ったら粉のせいですべすべした感じがある。欄外は特に問題はないでしょう。先にいこうか。

葵子茯苓散

方極文：「小便不利し、心下痞し、腫満する者を治す」

「葵子一斤（十錢）茯苓三兩（六錢）」

右二味。搗きて散となし、方寸匕を服す。日に三服する。小便利すれば則ち癒える。（白湯を以て一錢を送り下す）」

第一条：「妊娠。水気あり。身重く、小便不利し、洒淅惡寒し、起きれば則ち頭眩する」

按語：「為則按ずるに、当に心下悸の證あるべし。また按ずるに、葵子一斤は、本草綱目に、三兩に作る。今之れに従う」

○「婦人良方に、葵子を五兩茯苓三兩に作る。今之れに従う」

○「婦人にて、妊娠する毎に水腫して墮胎する者あり。若し他の逐水剤を用い難き者は、この方を煎服するに宜し。喘咳する者は、甘草麻黄湯を合わすを、よしと為す」

大塚：葵子はフユアオイの実ですね。妊娠中の浮腫で小便が出にくくなって寒けがするわけですね。そして立ち上がった時に眩暈がするというわけですね。欄外に妊娠する毎に浮腫があって流産する者に浮腫を治すつもりで利尿剤を使うとよけいに流産しやすくなると書いてある。昔ね、妊娠9か月くらいの妊婦で浮腫があったので越婢加朮湯を使ったんだよ。麻黄は妊婦には気をつけて使わなければいけないことは知っていたんだがその妊婦は腹も大きいけれど浮腫もひどくてまともに座れないんだよ。腰から下が特に浮腫がひどくて越婢加朮湯を三日くらい服用した時にうんと小水が出て子供が生まれたんだ。圧迫していたものが取れるからね、それで楽に出産出来たんだらう。だから生まれそうでなかなか生まれない時に麻黄剤を使うのはいいけれど妊娠4～5か月の時に安易に麻黄剤を使うと

困ることがあるかもしれないな。

吉本：甘草麻黄湯のところの欄外を見てみますと浮腫がある時の利水に使っていますね。

大塚：そう。甘草麻黄湯も利尿的に働くよ。次にいくか。

苓姜朮甘湯

方極文：「心下悸して、小便自利し、腰中冷えて、水中に座するが如く、或は疼重し、形水状の如き者を治す」

「甘草・朮各二兩（五分）乾姜・茯苓各四兩（一錢）

右四味。水五升を以て、煮て三升を取り、分ち温めて三服する。腰中即ち温む」（水一合二勺を以て、煮て六勺を取る）」

第一条：「腎著の病にして、その人身体重く、腰中冷え、水中に座するが如く、形水状の如くにして、反って渴せず、小便自利し、飲食故の如く、病下焦に属し、身勞して汗出で、衣裏冷湿、久久に之れを得れば、腰以下冷痛して、腰重きこと五千錢を帯びるが如し」

按語：「為則按ずるに、当に心下悸の證有るべし」

○「以下八方にて、方名を略称するは、但その便に従うのみ」

○「この方に杏仁を加えて、腎著湯と名づけ、妊娠浮腫し、小便自利し、腰髀冷痛して、喘咳する者を治す」

○「老人にして平日小便失禁し、腰腿沈重して、冷痛する者を治す。また男女にて違尿し、十四五才に至っても、なお止まざる者は、最も難治となす。この方に反鼻を加えればよく効を奏す。宜しく症にしたがって附子を加えるべし」

○「按ずるに、反って渴せずの三字は、当に小便自利の下に在るべし。また按ずるに、この症にして、小便不利して渴し、手掌足心煩熱する者は、八味丸が効あり」

大塚：小便自利とは小便がたくさん出ることだね。うんと冷え性で腰から下が水に浸かっているようで痛みもあり浮腫みもある場合です。以上のような状態を腎著の病というわけだね。のどは渴かないでそれでいて小便はたくさん出る。食欲には異常がないと。病としては下焦の病だから腰以下の症状があるということだね。「衣裏冷湿」とあるから着物の裏が湿って冷たくなるということ。長くその状態が続くと腰から下が冷えて痛んでくるんだと。五千錢ほどのお金を腰にぶら下げているほど重く痛むんだとこうゆうわけです。

これは冷え性で小便が近くって下半身が浮腫んだり重かったり冷えたりするということを書いてある条文ですが私はこの処方を使って効果があった例は一例くらいしかないんです。このとおりに効くようだと大変に便利な処方なんですけど思うようにいきません。

苓姜朮甘湯に杏仁を加えて腎著湯というのは後世方の処方です。ここでは妊娠時の浮腫みで小便が自利し、腰が冷えて咳が出る時に効くと書いてある。また老人で小便が漏れてしまい、あるいは腰から足にかけて重くて冷えて痛む者を治すると書いてある。私は戦前にはこの条文を参考に老人の泌尿器疾患にいろいろ使ったりしてみたんだ。戦後も夜尿症などに腎著湯を使ってみたんだがやはり効果が思うようになかったんだ。友人にもたずねてみたんだがやっぱり苓姜朮甘湯は評判がよくないんだよな。苓桂朮甘湯とか甘麦大棗湯の治験例はあっても最近の漢方誌にはこの苓姜朮甘湯の治験例はほとんどないんだよね。漢方の臨床にもほとんどないんだ。こんなに効きそうで効くように書いてある処方があるのはわからないけれど・・・欄外には男女の違尿で治りにくい者は反鼻、すなわちマムシを加えればよく治ると書いてある。私は反鼻は加えたことはないから一度はやる価値があるわね。

吉本：子供の夜尿症には先生は小建中湯を使われているようですが。

大塚：そう、私は小建中湯をよく使うね。

苓桂朮甘湯

方極文：「心下悸し、上衝し、起きれば則ち頭眩し、小便不利する者を治す」

「茯苓四兩（一錢二分）桂枝三兩（九分）朮・甘草各二兩（六分）

右四味。水六升を以て、煮て三升を取り、分ち温めて三服す（水一合二勺、煮て六勺を取る）」

第一条：「傷寒、若しくは吐し若しくは下した後、心下逆満、気胸に上衝し、起きれば頭眩し、脈沈緊、汗を発すれば則ち経を動かし、身振振揺となる者」

第二条：「心下に痰飲有り。胸脇支満し、目眩す」

第三条：「夫れ短気し微飲有るは、当に小便より之れを去るべし。苓桂朮甘湯之れを主どる。腎気丸も亦之れを主どる」

○：「飲家にて、眼目雲翳を生じ、昏暗して疼痛し、上衝頭眩して、臉腫れて__涙多き者を治す。__苡を加えれば尤も奇効有り。当に心胸の動悸、胸脇支満、心下逆満等の症を以て、目的と為すべし。応鐘散を兼用して時に紫圓、十棗等を以て之れを攻めれば、雀目に亦効有り」

○：「痰家は当に痰飲に作るべし」

○：「徐彬の曰く。支は、__定して去らずして、痞状の如きなりと」

○：「短気云々は、二方同じく小便を利すといえども、その主治する所は同じからず。この方は心下水飲を主とする。故にこの症に施して効有り。八味丸は小腹不仁を主とする。故に之れを心下停飲して短気する症に用いて、絶してその効無し。夫れ小腹不仁は、特り水毒のみならず、血も亦循ざるなり。八味丸が効有るの所以なり。よく事実を履みて、親しく之れを病者に験し、自ら之れを知る」

大塚：第一条の「傷寒、若しくは吐し若しくは下して後」の「後」という字が有ることでそれまでの症とは変わっていることを知らなければいけません。「心下逆満」というのはみぞおちは張っているけれどへその下の方はあまり張っていないで、下から突き上げてくるような感覚があること。それが胸にまで突き上げてくるのが「気胸に上衝し」ということです。気が上に上がってくればそれを動悸として感じてくる。そして立ち上がるとめまいがすると。だからこの処方目標はみぞおちが張って動悸がしたり、めまいがしたり、それからみぞおちをたたいてみて振水音がしたりするんだが、必ず振水音が有るとは限らないんだ。しかしながら小便の出は必ずといっていいほど悪いんです。

第二条ですがみぞおちに水が溜っておって胸がつまったようになってめまいがするというわけだ。第三条で「短気」とは息切れすることでそんな時は心下部に痰飲が有る場合だから小便よりこれを去った方がいいというわけ、それには苓桂朮甘湯と八味丸と二つの症が有るんだと。しかし八味丸をこんな場合に使うことは少ないんじゃないかと思うけどね。欄外で「飲家」とあるのは普段から水毒のある人ということ。「眼目雲翳」とは目に曇りが生ずることで角膜が白く濁ってくること。そして目が見えにくくなって痛むと。そしてのぼせてめまいがすると。そして瞼が腫れて涙が多く出る者を治すと。要するに水毒が腹に有ってそれが上衝して起こる症状だから水毒を去れば目の病気も治るというわけだ。したがって角膜炎、結膜炎など、体が弱い人で目の病気になりやすい人、それから仮性近視に効くと言われている。脚気で目にくる場合によく効くと言われているがこの頃はほとんど脚気はないから。__苳というのは車前子のことだから。苓桂朮甘湯加車前子という処方があるから車前子は利水の効が有るから都合がいいと。それから心下部に水がたまって動悸がして小便が出にくいということが目標になると。応鐘散とは大黃と川芎だね。雀目症とは鳥目のことだね。徐彬という人が言うには「支」とはみぞおちにもものが痞えている状態を言うんだと。「二方」というのは苓桂朮甘湯と腎気丸のことだが腎気丸とは八味腎気丸のこと。そして小腹不仁は特に水毒が原因ではなくて血がめぐらないから起きるんだから水毒をさばく苓桂朮甘湯では効かないんだと。そのことは実際に病人で試してみなければ

わからないと。こうゆうことね。苓桂朮甘湯は水毒に使うし八味丸は牡丹皮や地黄が入っていたりするので血に関係があることがわかるでしょう。苓桂朮甘湯は半夏厚朴湯とひじょうに似た症状のことがあるんだ。咽にものが引っかかったようでめまいがして動くと動悸がするという半夏厚朴湯とよく似た状態が苓桂朮甘湯にもあるんだ。だから半夏厚朴湯を使って治らない時に苓桂朮甘湯を使ったらよくなるということがある。腹症にしても腹満があって水毒が有るところはよく似ている。動悸がして寝られないといったこともよく似ているんだ。半夏厚朴湯だと思って効かない時に苓桂朮甘湯で効くことがあるからこのことは知っていた方がいい。ただ半夏厚朴湯の場合は神経症がともなう。小さなことでも気にしたり不安に思ったりするからそこが違うようだけどね。私が高知の田舎で診療していた頃、軍人の奥さんだったけど、長いこと寝込んでトイレにも行けなくなってめまいがひどくなってね、医者に診てもらったら神経症だということでプロム化ナトリウムをもらっているんだよ。診てくれというんで診に行ったら胃のあたりがジャブジャブ鳴っているんだ。そしてめまいがして起きれないんだよね。当時あまり詳しいことは知らなかったんだけど胃が張ったようで水毒が有ってめまいがあるから苓桂朮甘湯を使ってみようと思ひ、うちで煎じて二日分を持って行ったんだよ。そしたらね二日くらいしたらなんだかよさそうだと言うんで十日くらい飲ましたら一人で起き上がってトイレにも行けるようになったんだ。そして一月もしないうちに治ってしまったんだよ。二年間も寝ていた婦人が治ったもんだからびっくりしたんだ。私が漢方薬を最初に使って一番効いた例なんだ。それに苓桂朮甘湯は使いやすいんだ。

吉本：苓桂朮甘湯と五苓散との腹症の違いはあるんでしょうか？

大塚：腹症で特に使い分けることはないでしょう。と思うけど。じゃあ次にいこうか。

苓桂甘棗湯

方極文：「臍下悸し、而して攣急し上衝する者を治す」

「茯苓半斤（一錢二分）甘草三兩（四分五厘）大棗十五枚（五分五厘）桂枝四兩（六分）

右四味。水一斗を以て、まず茯苓を煮て、二升を減じ、諸薬を入れて、煮て三升を取る。滓を去り、一升を温服す。（水二合を以て煮て六勺を取る）日に三服す」

第一条：「発汗後、その人の臍下悸する者は、奔豚を作さんと欲す」

按語：「為則按ずるに、当に腹狗急するの證有るべし」

○：「奔豚は、悸して而して衝逆の甚だしきを謂う。説は桂枝加桂湯の標に見える。此の

症は間々瀉心湯を兼用すべき者有り。宜しく審らかに察するべし」

大塚：苓桂甘藶湯は苓桂朮甘湯の朮の代わりに大藶が入っているだけです。第一条に動悸があると書いてあるけれど苓桂朮甘湯でも動悸がありますよ。ただ急迫症状が強いんだね。だから発作性の心悸亢進症で脈がひじょうに速くなったり、急に息が止まりそうな動悸がしたりするんだ。ヒステリー性の腹痛なんかも奔豚に当てはまるから。下腹から胸に痛みが刺し込んできて死にそうに見えるような者。それから脈がひじょうに速くなって患者が今にも死ぬんじゃないかと大騒ぎするような場合。小学校に行くくらいの子で小児の自家中毒というのがある。親に不満があると発作を起こすんだ。親の注意を自分に引きつけようとしたり他人の目を引こうとするんだ。一種のヒステリーだ。ひどい時には血を吐いたりして親がびっくりするんだ。そんな場合は苓桂甘藶湯の症が多いんだ。これも飲みやすい薬だからね。苓桂甘藶湯に良姜と枳実と半夏が入ると良枳湯になるんだ。下腹から痛みが突き上げてちょうど胆のう結石の発作の痛みのような、そんな時に使う処方だ。神経性であったり発作性である場合の動悸とか痛みを使うと効くんだね。

苓桂五味甘草湯

方極文：「心下悸し、上衝し、咳し而して急迫する者を治す」

「茯苓・桂枝各四兩（八分）甘草三兩（六分）五味子半斤（一錢）

右四味、水八升を以て、煮て三升を取り、滓を去り、分ち温めて三服する（水一合六勺を以て、煮て六勺を取る）」

第一条：「__逆倚息し、臥することを得ざるは、小青龍湯之れを主どる。青龍湯下し已って、多唾口燥、寸脈沈、尺脈微、手足厥逆し、氣小腹より上って胸咽を衝き、手足痺し、其の面翕然として醉状の如く、因って復陰股に下流し、小便難く、時に復冒する者は、茯苓桂枝五味甘草湯を与えて、その氣衝を治す」←（大塚金匱要略303頁参照）

解説：『その氣衝を治す』という箇所だけれども、これはね氣逆を主どる薬には桂枝とか甘草もあるけれども五味子も使うんだ。気が上に上がって頭にものを被ったようになり耳が塞がったような感覚になった時に使うんだ。五苓散でも苓桂五味子甘草湯でもこのようなことがある。咳だけの問題ではなくてね。苓桂五味子甘草湯というのは前の処方の大藶の代わりに五味子が入っているんだね。「__逆倚息し」だから咳が下から突き上げてくるような感じがするんだね。そして仰向けに寝れないからものに寄りかかって寝るんだね。ちょうど喘息のような状態だね。呼吸が苦しくて寝ておれないんだね。小青龍湯のよ

うな症状であるので小青龍湯を服してみたが唾がうんと出て口がはしゃぐんだ。寸脈が沈んで尺脈が微かであると。これは臨床上でははっきりしないからあてにしないでもいいけれども「手足厥逆」これは大事です。手足が冷たくなって気が下腹から胸の方につき上がってきて「手足痺」痺というのは痺れること、「面翕然として醉状の如し」酔ったようになる。そうかと思うと小便が出にくくなる。また頭にものを被さっているようだ。それで苓桂五味子甘草湯で気が上に突き上がってくるようになるのを治すと。こうゆうことです。ここで小青龍湯を使った後でこれを使うように書いてあるけれども、それと関係なく薬能から考えてみると五味子が大棗の代わりに入っているということで使い方がわかるわけね。欄外を読んでごらん。

○：「以下五方は、その症を論じ薬を用うるに、その言純粹ならず。然れども痰飲咳嗽喘急等の症に選用し、皆効有り。症に随って南呂丸、陷胸丸、十棗湯、白散、紫圓等を兼用すべし」

127 ○：「

128

129

解説：えーとね、苓桂五味子甘草湯以下五方とあるけれども、これら一連の処方今日の言葉でいえば炎症のあまりない場合、漢方でいえば熱症のない場合に使う処方だからね。

「以下五方、その症を論じ薬を用うるに、その言純粹ならず」とあるから古方の純然たる処方ではないだろうと思うというような書き方だろう。咳があったり水毒がある場合に選用するのに皆、効果があるけれども「南呂丸、陷胸丸、十棗湯、白散、紫圓等を兼用」すればいいと。また苓桂朮甘湯とは一味だけの違いだからその方意を知って使いなさいと。小青龍湯は内側に痰飲が有って外に外邪が有って、外邪の為に内側の水毒が動かされて起こる咳や呼吸困難に効くわけだ。「以下五方云々～外候なし」とあるから熱が有ったり悪風が有ったり頭痛が有ったりの外候があれば以下五方は使われない。いわゆる外症がない場合だな。内側に水毒が溜っておってそれが原因で起きる咳とか頭痛とかに使うんだね。そんな患者で咳をした時に粘っこい痰が出る場合、痰に血が混じってうんと臭い膿のような痰が出た場合、あるいは熱の為に口が渴いてくるような場合はこれら五方の処方が治せるところではないと。熱があったり炎症がある場合はだめだというわけだ。だから冷え性であり熱感がないことを考えたらいい。それで中耳炎に苓桂五味子甘草湯が効くことがある。これはほとんど熱もなく炎症もなく膿も出なくて水が出るんだ。鼓膜の内側にうす

い水が溜るんだよね。それで注射器で抜くんだが今日取ると明日また取るようになるんだ。そういう場合に苓桂五味子甘草湯が効くんだ。水毒がある為にまた気が上ってというようなことが原因なんだ。熱があったり寒気があったりという場合には使わないんだ。したがって脈も浮かないで沈んで顔色も悪い。ただ酒に酔っ払ったような赤い顔をしていることがあるけれども。非常に手足が冷えるのも特徴だ。

苓甘五味姜辛湯

方極文：

大塚：此の処方ね、前の処方の苓桂五味甘草湯を服して気が下がってきたと、下がってきたけれども咳がよく出る、そしてみぞおちが張ってくる、それで桂枝を去って乾姜と細辛を加えて温めて胸の張って咳の出るのを治す。苓甘五味姜辛湯というのは上衝がないわけだから胸が張ってそこに水毒が有って咳が出る場合に使うとなっているが、実際はそんな時には苓甘姜味辛夏仁湯が使われることが多いんだ。

苓甘姜味辛夏湯

方極文：

大塚：それで前の苓甘五味姜辛湯を使ったら胸が張って咳が出るのが止むんだ。『咳満即ち止み、而して復喝す』とあるから今度はのどが渴いてきたんだ。それは『衝気復発す』とあるから気がまた上に上がろうとするからなんだと。それは細辛と乾姜が熱薬で温め過ぎたからのども渴いてくるんだというわけ。若しこの場合に逆にのどの渴きが止むんだったら水毒が胃にたまって支飲がある場合だと、支飲があれば頭にものかぶっているような状態があって吐き気が来るんだと。そんな場合には今度は半夏を入れて水を去るというわけ。此の場合の気が上に上がろうするのは桂枝で下げるのではなくて半夏で気が上に上がろうとするのを下げるわけ。これは水が禍している場合だから。気の上りに見えるけれ

ども胃に有る水毒の原因で上に気が上がるようになっているから、これは半夏で下げなければいかんというわけだ。これは非常に微妙な処でしょう。では先を読んで。

苓甘姜味辛夏仁湯

方極文：

第一条：

大塚：苓甘姜味辛夏仁湯は泰男がよく使う処方ですが『水去り嘔止み』と有るから水を去って嘔が止んだと。ところが『其人形腫者』だから浮腫んでくる場合には杏仁を入れると。その浮腫は麻黄で取るように見ると。だから麻黄を入れたら良さそうに見えるけれども、これを入れないのは血行が悪くてしびれ感が有るような、そういう場合には麻黄を入れると反って手足厥冷を起こしてくるから、なぜそうかというとその人は貧血状態になっておって麻黄でその陽を発するとますますその症状が悪くなるからということ。だからこれが小青龍湯と苓甘姜味辛夏仁湯との区別だから。だから患者さんを看て顔色が悪くて貧血状態で胃腸が弱いような人でちょっと咳が出たり、ゼイゼイいったりした場合に麻黄を使うのは無理だな～と思った時には苓甘姜味辛夏仁湯の症だから。だから小青龍湯を使った為に食欲が無くなったり疲れたりしてきたらむしろこれは苓甘姜味辛夏仁湯じゃないかなと考えた方がいい。一口で言うと苓甘姜味辛夏仁湯は小青龍湯で表症が無くて、小青龍湯の裏の症『裏』だけの症で来た場合と考えればいい。脈も弱くて沈んでくるし胃腸も弱い。食欲もあんまり無いと。非常に冷え性だと。そのように陽でなく陰の症が出てくるから。だから陰陽の区別が大事になってくる。そういう意味で欄外に書いてあるように『痰飲家にて、平日咳嗽に苦しむ者は、此の方の半夏に代えるに栝蒴実をもって、白密にて膏と為して用うれば甚だ効有り』とあるんだ。気管支炎なんかに使える訳ね。その次を読んで。

苓甘姜味辛夏仁黄湯

方極文：

第一条：

大塚：『若し面熱して酔えるが如し』とあるのはね、前の苓桂五味甘草湯に似てるでしょう。顔が赤くて酔ったようがあると。『此れは胃熱上衝してその面を薫すと為す』これは大黄を使う場合だからすこし実証になってくるわけね。だから前の『酔えるが如し』と言ったってちっと違うわけ。大黄が行く場合だから。消炎作用が有る場合だ。苓甘姜味辛夏仁湯に大黄が入ることだから多少これに・・・